

まえがき

信仰の真理は、主イエス・キリストから使徒たちへ、使徒たちからその弟子たちへと伝えられ、今日に至っています。

教会は「そして、多くの証人の前でわたしから聞いたことを、ほかの人々にも教えることのできる忠実な人たちにゆだねなさい」（テモテ二・2）との言葉に従って、その真理を継承してきました。

私も、そのために召された者として、70年以上の牧会・伝道で学んだことを、次の世代に「伝える」責任を感じています。

ここにあるものほとんどは、私が二〇〇五年に北米ホーリネス教団引退牧師となり、その年の一二月よりストーリージ長老教会で礼拝説教者として奉仕するようになってから、教会の月報に掲載したもので

す。随分以前に書いたものですが、少しなりとも、教会の真理継承における役割を果たすものとなりますなら、感謝に絶えません。

これを読んでくださる方々からのご意見、ご感想をいただけますなら幸いです。

二〇二四年ペンテコステ

北米ホーリネス教団引退牧師

細 見 剛 正

目次

基準とすべきもの	1	ことばは神であった	16
偽物を見破る	2	慈しみはとこしえに	18
迷路を脱出	4	この道を歩け	19
あなたを見ている神	6	今わたしが生きているのは	21
教会のかたち	8	愛と知	23
教会の使命	9	命ある限り	25
ああ十字架	11	初めに、神	26
十字架めざして	13	キリストの平安	27
日々の十字架	14	祈るとき	28
		しかたがある	29

嘘のような本当	30	内と外	46
霊に燃えて	32	忠告を素直に	47
礼拝と奉仕	34	感謝する人	49
みんなもよびな	35	機先を制する	50
オリンピックと信仰生活	36	救いの確信	52
「ローマ書があるやないか」	38	恵みの豊かさの中で	54
別の道を通つて	40	見えないものを見る	56
迫り来るキリストの愛	42	教会を優勢にするもの	57
彼を受け入れた者	43	今日、神の声を聞くなら	59
内なる生活	44	時を有効に	61

神によつて神のために……	63
神の恵みによつて……	65
キリストの復活が明らかにした五つの事実……	67
復活は死への勝利……	68
復活の希望……	69
復活の序曲……	70
復活の生ける証人……	72
信仰とはこんなもの……	74
深くそして広く……	76
信仰とユーモア……	78

人生のガイドブック……	80
本当に重要なこと……	82
人生探求の旅……	84
共に集まる祝福……	86
信仰は根のように……	88
人知をはるかに超えたキリストの愛……	90
聖書を読む……	92
探し求める神……	94
十字架の力……	96
文字と霊……	98

「無力」力……………	100
スピリット対スピリット……………	102
キリスト御自身……………	104
祈りの人ネヘミヤ……………	106
小さく見えることにも……………	108
神の御顔……………	110
教会の死と復活……………	112
目標をもって生きる……………	114
感謝の源泉……………	116
クリスマス、その後……………	118

「夕べがあり、朝があった」……………	120
ただ一事を求めて……………	122
みことばに照らして……………	124
最小者への特権……………	126
最小のものに学ぶ……………	128
光の子として歩みなさい……………	130
救いは十字架に……………	132
神の恵みを見る……………	134
発展はまず基礎から……………	136
風の教訓……………	138

み言葉が開かれると……………	140
信仰とは「信じて仰ぐ」と……………	142
神の賭け〜旧約聖書ヨブ記通観(1)……………	144
私の贖い主〜ヨブ記通観(2)……………	146
新しい出発点〜ヨブ記通観(3)……………	148
内に働く復活の偉力……………	150
復活が事実でないとしたら……………	152
ただわたしの霊によって……………	154
聖書の知恵袋を開いて学ぼう……………	156
コヘレトの言葉〜逆説の福音……………	158

この希望に支えられて……………	160
良き牧者の特質……………	162
まだその続きがある……………	164
神は真実である……………	166
先立つて導かれる主……………	168
将来への牧者の祈り……………	170
教会に委ねられた使命……………	172
召命と引退……………	175

基準とすべきもの

昔、田舎のある町の中心に時計台があり、町の人々から名物として親しまれ、その時計に自分たちの時計を合わせていた。

いつも正確に時を告げるその時計が、ある時どうしたことが、十分も遅れて時刻を示していた。ひとりの青年が早速、電話局にダイヤルして正確な時刻を尋ねたら、交換手は時計台と同じ時刻を答えたのでがっかり。電話局の人も窓から時計台を見ては遅れている時刻とも知らずに伝えていたのである。

これは私が青年時代に何かの本で読んだイラスト（例話）であるが、私たちが実際に陥りやすい誤りをよく教えている。いつも正確に時を告げる時計であったからこそ、交換手も信頼し切ってい

たのである。しかし正確なはずの時計も遅れることがある。こうした場合、何を基準にすればよいのか。

私たちクリスチャンが間違いない判断をし、悔いのない行動をするのに基準にすべきものがあるとすれば、一体それは何だろうか。前例に照らすのも、先輩に相談するのもよい。しかしそれも参考までであつて基準ではないはず。はつきり言うならば、基準にすべきものは神のことば、聖書を差し置いて他にない。

主は言われた。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」（マタイ 24・35）だから、私たちは、直面する様々な実際問題について、聖書がどう語っているかを真剣に学ぶべきではないだろうか。

偽物を見破る

いつの時代、どこの社会でも似て非なるもの、つまり偽物が横行する。キリスト教会においても、初代から現在まで、似て非なる信仰「異端」と戦ってきた。しかし今日、案外気づかないうちに私たちの信仰を白蟻のように内部から侵食し、霊的生命を枯渇こかつさせているものがあるのを知っておられるだろうか。最近読んで深い感銘をうけた『キリスト教信仰——真の信仰をめざして』（一麦出版社）の中で、著者のD・ブローシユ博士は、私たちの信仰に似て非なるものが、密かに忍び込んではいないかと、六つの主義を指摘しておられる。以下それを引用したい。これを自己点検のリストとしてみてはどうだろうか。

律法主義 神が自分が罪人であっても受け入れ

てくださることを信じずに、律法を守ることによって、自分を神の前に正しいものとしようとするること。

形式主義 活いける神との深い交わりを持たずに、儀式や教理などを表面的に守ること。

人道主義 人を活ける神に導くことを忘れ、社会的な奉仕活動そのものが、神に対する奉仕とみなすこと。

熱狂主義 神が約束されたものを期待して待つことなく、神秘的な体験をすぐに求めて、それを信仰の確かさの根拠にしようとすること。

折衷主義 キリスト教を唯一の真理とせず、他の教えもそれ自体で真理であるとして、それらと同調しようとすること。

英雄主義 キリストの弟子となつて、犠牲の多
い道を歩むことをせず、この世の名声をうるた

めに偉業を成し遂げようとする事。

犬を飼つてみていろいろ教えられることがある。犬の嗅覚きゆうかくは人間の一万倍とか。鼻の感覚は実に鋭い。食物を口に入れる前に必ず匂いを嗅いで、その良否を判断し確かめる習性がある。私たちに、特に今日のような時代、物事の識別をする鋭敏な道徳的・靈的感覺がほしいものだ。

私たちには信仰と生活の唯一の基準である聖書が与えられ、その上、聖靈の内的照明が与えられている。どのような状況に直面してもあわてることなく、神のことばである聖書をそのまま信じ、聖靈の導きを確信して、使徒パウロと共に次のように祈ろうではないか。

「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられますように。」（フィリピ1・9）

∩
∴
途
中
省
略
∴
∪



Penguin Club

<https://penguinclub.net>

召命と引退

——引退のあいさつ

私は16歳の暮れ、神戸は湊川新開地にある伝道館での特別伝道集会で本田弘慈先生から十字架のメッセージを聞いて罪を悔い改め、新生を経験しました。

まず最初に教会奉仕をしたのは、サンデースクールの手伝いで、これは自らのために聖書を学ぶ良い機会となりました。翌年教師研修会に出席するように勧められ早朝祈っている時、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」（マタイ4・19）とのみ言葉が私の心に迫ってきました。そのとき以来、主は私に何かをさせようとして召しておられるという厳粛な思いが私を捕らえて離れませんでした。

その夏、神戸駅前で恥も外聞も忘れて街頭伝道を一ヶ月している間に主の召命に応えて献身の第一歩を踏み出しました。兄は献身のことを聞いて「目に見えんもの信じてどうしてやっていけるんや。お前はアホや」と言い、祖母は「牧師は貧乏に決まってる。何で牧師なんかに」と言つて悲しみました。ただ父だけは献身を認めてくれて「どうしても食えなくなったら帰つておいで」といつてくれました。

1948年桜の咲く頃、神戸神学院（関西聖書神学校の前身）に入学を許され、4年間の学びと実習を通して伝道者として訓練していただきました。卒業後、母教会である神戸中央教会を振り出しに、塩尻教会、出石教会、天授が丘教会（京都）、アメリカに留学してからはサンフアンド教会、サンディエゴ教会、ホノルル教会、パール

シテイ・ハイランド教会、ロサンゼルス教会、再びサンファナンド教会で奉職し、最後に当サンロレンゾ教会で8年7ヶ月、引退前、最後の年月を過しました。

口癖のように「伝道者に引退はなし」と言ってきましたが、その通り、主に召された者として神の御許に召される日まで仕事は終わっていません。教団という体制の中で一応、引退して職務からは自由になりますが、「主は今後、私に何をさせようとしておられるのか」と謙虚に祈り求めていきたいと願っております。

私を今日まで励まし献身のあり方を導いたのは、世界宣教団の創立者C・T・スタッドの言葉でした。「主が私たちのために生命を捨ててくださったのであれば、私たちがどんな犠牲を払っても払いすぎることはない。」いよいよイースター

礼拝を最後に教会とお別れすることになります
が、今日まで祈りと寛容をもって助け、支えてく
だされた方々にこの紙面を借りて心から感謝し、
これからも祝福と恵みが豊かでありますようお願い
り申し上げます。(2005年3月11日)

著者略歴

細見剛正 Rev. David Takemasa Hosomi

1931年、神戸市に生まれる。1946年、本田弘慈師により信仰に導かれ、翌年にバプテスマ（洗礼）を受ける。1948年、神戸神学院に入学。同校は関西聖書神学校となり、1952年、関西聖書神学校第一期生として卒業。日本イエス・キリスト教団の神戸中央教会、塩尻教会、出石教会、天授が丘教会などで奉仕。1962年、渡米、アズサ・パシフィック大学（B.A.）とアメリカン・バプテスト神学校（M.Div.）を卒業。1967年、北米ホーリネス教団に加入。サンファンナンド教会とサンディエゴ教会を兼牧。1969年、ホノルル教会に転任し、パールシティ・ハイランド教会（現ウエスト・オアフ教会）でも奉仕。1981年、ロサンゼルス教会に転任。北米ホーリネス教団委員長も務める。1987年、妻の恒子を亡くす。1989年、山崎晴代と再婚。その後、再びサンファンナンド教会で奉仕。教団常務書記を務める。1996年、サンロレンゾ教会に転任し、2005年3月、北米ホーリネス教団引退牧師となるまで、37年間教団に仕えた。2005年12月より、ストージ長老教会日本語部で礼拝説教者として奉仕。2021年、卒寿（90歳）を迎えたが、ストージ長老教会で礼拝説教を続けている。

試し読みはここまでです。

お気に入りましたら、

ご注文ください。



Penguin Club

<https://penguinclub.net>